ログル王国の乙女たちによる3日間の断食

（クレティアン・ド・トロワ『荷車の騎士』3530-37行）
――インド＝ヨーロッパ神話の３つ首怪物の記憶――

Les demoiselles du royaume de Logres qui jeûnent pendant trois jours

(Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, vv. 3530-37) : souvenir mythique du Tricéphale d'origine indo-européenne

渡　邉　浩　司

要　　旨

「アーサー王物語」の実質的な創始者クレティアン・ド・トロワが12世紀後半に著した『ランスロまたは荷車の騎士』は，ゴール国の王子メレアガンによるログル国の王妃誘拐と，勇士ランスロによる王妃救出に焦点を当てている。この物語の中では，ランスロとメレアガンの最初の決闘直前に，ログル王国の乙女たちが３日間にわたって断食と祈願行進を行ったことが記されている。本稿はこの部分に注目し，物語を季節神話とインド＝ヨーロッパ戦士の通過儀礼から解釈する試みである。季節神話の観点から見た場合，「キリスト昇天祭」に王妃を誘拐するメレアガンは，早春の作物に危害を与える神獣としてのドラゴン（「豊作祈願祭」のドラゴン）を想起させる。一方で物語をインド＝ヨーロッパ神話の枠内で検討すると，ランスロが「３度」戦うことになるメレアガンは，通過儀礼の過程にある戦士が倒す３つ首怪物に相当する。

キーワード

アーサー王物語，クレティアン・ド・トロワ，ラーンスロット，
インド＝ヨーロッパ神話，ドラゴン

1．はじめに

12世紀中頃から英仏フランス語圏に登場した，ラテン語ではなく古フランス語で著された「ロマン」（roman）と呼ばれる文学ジャンルを分析するためには，同時代の受容形態に留意する必要がある。そもそも「ロマン」は，個人的な読書（黙読）を意図したものではなく，文字を読むことのできる者が宮廷内での集まり（サークルやサロンのような場）で朗読する形で親しまれていたと考えられている[1)]。こうした朗読会を主催したのは，物語作家たちの庇護者や，文学を愛好する貴族だったと推測される。「アーサー王物語」の実質的な創始者クレティアン・ド・トロワ（Chrétien de Troyes）[2)] の『イヴァンまたはライオンを連れた騎士』（*Yvain ou Le Chevalier au Lion*）[3)]（以下『イヴァン』と略記，1177-81年頃成立）の結末近くには，16歳になった娘が行う朗読に，貴族の両親が耳を傾ける場面が出てくる。

Et messire Yvains lors s’en antre
El vergier, aprés li sa rote.
Voit apoié desor son cote
Un riche home qui se gisoit
Sor un drap de soie, et lisoit
Une pucele devant lui
En un romans, ne sai de cui.
Et por le romans escoter
S’il estoit venue acoter
Une dame, et s’estoit sa mere,
Et li sires estoit ses pere.
Si se porent mout esjoïr

De li bien veoir et oïr,

Car il n'avoient plus d'enfanz ; (vv. 5362-75)

我がイヴァン殿は，そこで庭園に入り，彼の後にお供の者らが続いた。彼はある高貴な人が絹布の上に，肘をついて坐っているのを目にした。その人の前で，乙女が１人，あるロマンを読んでいたが，その内容は私には分からない。ロマンを聞くために，ある奥方がやって来て肘をついていたが，それは乙女の母で，殿方は乙女の父だった。２人は娘の姿を見て，話に耳を傾けるのを充分に楽しむことができた。なぜなら，２人には他に子供がいなかったからである。

この一節は，ヨーロッパ中世期の朗読形態および，識字層と非識字層の存在を示唆してくれる。中世フランスの文学的なメッセージは，ポール・ズムトールが指摘したように，「声」と「聴取」によって成立し，「文字」はこうした受容形態を支える媒体に過ぎなかった[4)]。そのため，古フランス語による「ロマン」の本質を理解するには，同時代の聴衆にならって，語り手の「声」に真摯に耳を傾ける必要がある[5)]。

中世盛期の「ロマン」が読むべきジャンルではなく，聞くべきジャンルであったという前提に立つと，作品内に張りめぐらされた時間標識は重要な意味を持ってくる。黙読用の書物を手にしていた訳ではない中世期の聴衆には，筋書きの詳細を確かめるために，ページを繰って前に戻る手立てがなかったからである。すべては聴衆の記憶に託されていたが，普通の人間であれば記憶にも限界があったに違いない。そのため物語作家は，聴衆が朗読作品の筋書きを無理なく追っていけるように，作品の様々な場面に時間標識をちりばめたのである。かつて言語学者ロマン・ヤコブソンが「言語学と詩学」（1960年）と題する論考[6)]の中で提唱したコミュニケーションの６機能図式の中では，こうした時間標識の持つ意味は，「受け手」

に焦点を合わせた「動能的」機能と密接な関連がある。

クレティアン・ド・トロワが『イヴァン』と同時期に著した『ランスロまたは荷車の騎士』（以下『荷車の騎士』と略記）（*Lancelot ou Le Chevalier de la Charrette*）[7] を中世期の聴衆の立場から読み直してみると，作品に張りめぐらされた時間標識の重要性を再認識することができる[8]。物語はある年の「キリスト昇天祭」（'Acenssïon', v. 30）にアーサー王が開いた宮廷[9] へ，ゴール（Gorre）国の王子メレアガン（Méléagant）（英語名メリアガーント）が現れ，王妃グニエーヴル（Guenièvre）（英語名グウィネヴィア）を連れ去る場面から始まり，最後はアーサー王宮廷でランスロ（Lancelot）（英語名ラーンスロット）がメレアガンとの３度目の決闘を制して幕となる。誘拐された王妃の救出には，ランスロとゴーヴァン（Gauvain）（英語名ガウェイン）が向かうが，物語は主としてランスロの冒険に焦点を当てている。主人公の１日の動きを示す時間標識は，聖務日課（教会の祈り）を行う様々な時間帯，つまり「１時課」（'prime'，午前６時頃），「９時課」（'none'，午後３時頃），「晩課」（'vespre'，日没）のほか，朝・昼・晩・夜によって指示されており，聴衆はアーサー王宮廷を出立したランスロが「剣の橋」を渡ってゴール国へ入り込み，メレアガンとの最初の決闘を行うまでを，日毎に辿っていくことができる[10]。

ランスロがゴール国でメレアガンとの最初の決闘を優勢のうちに終えるエピソード（vv. 3481-3931）は，全体で7122行を数える『荷車の騎士』の中程に位置する。ところで，このエピソードまでの時間標識に注目した場合，一見奇異に映る箇所がある。それは決闘が始まる直前に記された，次の詩行である。

Trois jorz avoient geüné
Et alé nuz piez et an lenges

Totes les puceles estrenges
Del rëaume le roi Artu,
Por ce que Dex force et vertu
Donast contre son aversaire
Au chevalier, qui devoit faire
La bataille por les cheitis. (vv. 3530-37)

アーサー王国の生まれで，この国へ連れて来られたすべての乙女は，囚われ人たちを解放するために敵と戦わねばならぬ騎士に，神がみなぎる力を与えてくれるよう，３日間にわたって断食をし，裸足で苦行衣をまとって行進していた。

アーサー王の妃を誘拐する以前にもメレアガンは，アーサー王が支配するログル王国の騎士，貴婦人，乙女らをゴール国で隷属状態に置いていた。こうした境遇にあった乙女たちがこぞって，決闘を控えたランスロのために，3日間にわたって断食をし，神に祈りながら行進したというのである。この一節について，中世フランス文学研究のパイオニアの１人ガストン・パリスは，ランスロが決闘の場へ前日の晩に到着したばかりなのに，乙女たちが３日間の断食と祈願行進をすでに終えていたというのは理解に苦しむと指摘している[11)]。確かにこの一節を文字通りに受け取れば，ログル王国からゴール王国へ向かう途中で，ランスロが番人騎士を倒して浅瀬を通過した第887行あたりから，ランスロの動向を知らぬはずの乙女たちが断食と祈願行進を開始したことになってしまう[12)]。本稿では，物語の時間から見た場合には齟齬に映るこの一節に，物語の底流をなす祝祭と神話の時間が表出している可能性を探ってみたい。

2．「豊作祈願祭」の記憶

『荷車の騎士』の筋書きは「キリスト昇天祭」に始まる。この祭りは，移動祝日である「復活祭」の40日後に来る。「復活祭」は「春分後の最初の満月の次の日曜日」と定められているため，その日取りは西方教会では３月22日から４月25日の間に来る。したがって，４月28日から６月１日の間に来る「キリスト昇天祭」は，ほぼ５月の祝祭だと考えてよい。こうした季節的文脈に立つと，ログル王国の乙女たちによる３日間の断食と祈願行進は，まさしく「キリスト昇天祭」前の３日間，つまり月曜から水曜にかけて行われる「豊作祈願祭」を想起させる。早春のこの時期は，畑に植えられた作物にとっては特に危険であり，「赤褐色の月」（lune rousse）と呼ばれる月が姿を見せる期間にあたる[13)]。この時節の月がこう呼ばれたのは，晩霜や北風を招いて作物を「赤褐色」に枯らす危険があると考えられていたためである。

2-1　断食と祈願行進の来歴

「豊作祈願祭」は，フランス南東部ドーフィネ地方の町ヴィエンヌ（Vienne）で司教を務めたマメール（Mamert）（ラテン語名マメルトゥス Mamertus）が，470年頃に始めたとされる。３日間の「豊作祈願祭」は４月28日から６月３日の間に来る移動祝日[14)]であるが，後に列聖されたマメールの祝日５月11日が，「豊作祈願祭」の日取りの枠内に収まっているのは偶然ではない。ヤコブス・デ・ウォラギネ（Jacobus de Voragine）が編纂した『黄金伝説』（*Legenda aurea*）（1261-67年頃）によれば，当時ヴィエンヌでは大地震が起こり，夜間には怪しげな声や物音が聞こえたりしたばかりか，「復活祭」には悪霊が野獣たちに入り込んで人々を食い殺すという災厄に見舞われた。そのためマメールは人々に３日間にわたる断食を指

示し，祈願行進を求めたところ，災厄が収束に向かったという[15)]。「豊作祈願祭」に相当するフランス語「ロガシオン」（Rogations）のラテン語名は「ロガーティオーネース」（Rogationes）であり，その名は「懇願する」を意味する動詞「ロガーレ」（rogare）に由来する。つまり「豊作祈願祭（ロガシオン）」は，大地の恵みを災厄から守るよう神に「懇願する」祭りなのである。511年に開催されたオルレアン公会議では全ガリアにこの祭りを広めるよう取り決めがなされ，９世紀になると教皇レオ３世（Papa Leo III）がローマにこの祭りを普及させた[16)]。

このように『黄金伝説』によると，「豊作祈願祭」は教会のお墨付きを得たキリスト教の祭りだとされているが，「赤褐色の月」の時節に祭りを行う根拠を，聖書に見つけることはできない。この祭りの古層を推測する上で重要な鍵となるのは，十字架を背負い，鐘を打ち鳴らし，旗を掲げていた行進の中に，場所によっては尻尾の長いドラゴンの似姿を担ぐ一団が存在したという，ヤコブス・デ・ウォラギネの証言である（ガリアの教会では，ドラゴンの長い尾に藁のようなものを詰めていたという）。「豊作祈願祭」に登場するドラゴンは，『黄金伝説』が依拠するキリスト教的な解釈によれば，地元の聖人によって手なづけられた悪魔的存在であり，聖人の救世主的偉業は異教に対するキリスト教の勝利を象徴している。これに対して前キリスト教時代の考え方によれば，「豊作祈願祭」のドラゴンは，水を飲み込むことで作物の成長を妨げる恐るべき神獣だったと考えられるのである。

2-2　ドラゴンの叫び声

ヤコブス・デ・ウォラギネは先述の通り，５世紀にヴィエンヌの町を襲った災厄の１つとして，夜間に聞こえた怪しげな声や物音を挙げているが，こうした声や物音の主もドラゴンだった可能性がある。その傍証とな

るのは，中世ウェールズの幻想物語集『マビノギオン』（*Y Mabinogion*）が収録する「スィッズとスェヴェリスの物語」（*Cyvranc Llydd a Llevelis*）[17] である。この物語によると，スィッズが治めていたブリテン島（イニス・プリダイン Ynys Prydein）を３つの災禍（ゴルメス gormes）が襲っていた。そのうちの２つ目の災禍は，５月祭の前夜にブリテン島の各地の炉辺で上がる叫び声だった。この声を聞くと，人々は心臓を引き裂かれ，男たちは恐怖のために力を失い，妊娠中の女たちは流産し，動物や木々，大地や川や湖もことごとく荒れ果ててしまったという。この災禍の謎解きを行ったスィッズの弟，フランス（フラインク Freinc）王スェヴェリスによると，毎年この時期に異国のドラゴンが襲い掛かってくるため，スィッズの国のドラゴンが恐ろしい叫び声を上げているのだった。実際に国の中心に穴を掘ってみると，そこから２匹のドラゴンの戦いが見られた。戦いに疲れたドラゴンたちは，あらかじめスィッズが用意させた蜂蜜酒（ミード）を飲み干して眠り込む。その間に捕えられた２匹のドラゴンが地中に埋められ，災禍はようやく収束する[18]。

「スィッズとスェヴェリスの物語」に認められる，早春の頃に恐るべき叫び声を上げて人間・植物・動物すべてを不毛にするドラゴン[19] を国王が退治するという筋書きは，キリスト教の聖人によるドラゴン退治の祖型にあたると考えられる。その淵源はおそらくインド＝ヨーロッパの神話伝承に馴染みの，神や英雄によるドラゴン退治であり，最初期の例としては，古代インドのヴェーダ神話が伝えるインドラ（Indra）による蛇ヴリトラ（Vṛtra）退治[20] を挙げることができる。山の中に水を隠して旱魃や悪天候を引き起こしていたヴリトラ（「障害」の意）を殺害することで，インドラは作物の生育に不可欠な水の解放をもたらしている。以上の推測が正しければ，『荷車の騎士』3530-37行に言及のある，ログル王国の乙女たちによる３日間の断食と祈願行進は，ヴィエンヌの司教マメールが人々に命じ

た３日間の断食と祈願行進を示唆し，「豊作祈願祭」に登場するドラゴンは元来，早春の農産物に打撃を与える災厄の元凶，つまり「赤褐色の月」を具現する神獣だったと考えられる。

３．聖人によるドラゴン退治

こうした季節的文脈から『荷車の騎士』を検討すると，「キリスト昇天祭」にアーサー王の妃を連れ去り，最終的にランスロに倒されるメレアガンは，インドラが退治した蛇ヴリトラのごとき，共同体にとっての災厄である，早春の作物を襲う神獣を具現している可能性が出てくる。本章では傍証として，ヨーロッパ各地の伝承に登場してきたドラゴンに注目し，その縁起譚となる地元の聖人によるドラゴン退治の諸例を検討する。こうした縁起譚で重要なのは，ドラゴン退治を行う聖人たちの祝日が，移動祝日である「豊作祈願祭」の日取りの枠内に収まっている点である。こうした民俗伝承を扱った先行研究の中で特筆すべきは，フランスの民俗学者マリ＝フランス・グースカンが1981年に刊行した『ドラゴンの月』（*Le Mois de Dragons*）[21] である。「ドラゴンの月」が５月を指しているのは，フランス各地の「豊作祈願祭」に様々なドラゴンの似姿やハリボテが登場してきたからである[22]。ジャン＝マリ・プリヴァによると，フランスにはこうしたドラゴン伝説を持つ町が40以上もあるという[23]。

3-1　聖クレマンによるグラウリ退治

「豊作祈願祭」の行進に登場してきたドラゴンのうち，フランス東部ロレーヌ地方の町メッス（Metz）を苦しめていたとされるのがグラウリ（Graoully）である（写真１）。パウルス・ディアコヌス（Paulus Diaconus）は早くも８世紀に，メッスの初代司教クレマン（Clément）が，町の外にあった円形闘技場の地下の洞穴に居を定め，そこに聖ペテロに捧げた礼拝

（出所）筆者撮影

写真１　建物の２階の窓から吊されたグラウリ像
（メッス，テゾン通り）

堂を作ったところ，蛇や害獣たちがその場を後にしたと記している[24]。しかし聖クレマンがドラゴンを手なづけたという伝説が登場するのは，聖クレマン教会の修道士たちが10世紀後半から執筆を始めた聖人伝である[25]。それによると，聖クレマンがメッスへやって来たとき，町にはびこる蛇たちが，吐く息で町を汚していた。そこで聖クレマンは，偶像崇拝こそが人々の苦しみの原因だと述べ，メッスの人々をキリスト教に改宗させる。そして蛇たちの棲む洞窟へ向かい，ストラ（帯状の祭服）で一番大きな蛇（ドラゴン）[26] を縛りつけると，近くを流れていたセイユ（Seille）川を仲間の蛇たちとともに渡り，二度と姿を見せぬようその蛇に命じたという。

パリ・アルスナル図書館所蔵の5227番写本が伝える『聖クレマン伝』（*Vie de saint Clément*）[27] は，1303年にラテン語からフランス語に翻訳されたもの[28] であるが，この作品によるとグラウリ退治を行った聖クレマンの

命日は11月23日である[29)]。一方で同じ『聖クレマン伝』の結末近くには，メッス司教エリマン（Hériman）が1045年５月２日に，聖クレマンの亡骸の移送（translation）を厳かに行ったことが記されている[30)]。メッスの民俗学者ラファエル・ド・ヴェストファレンによると，11世紀の時点ですでに，「豊作祈願祭」の行進に登場した３本の赤い幟のうちの１本に，ドラゴンの頭が取り付けられていたという[31)]。したがって少なくとも11世紀以降，グラウリと聖クレマンの対決は，「豊作祈願祭」の日取りの枠内にある聖人の亡骸の移送を祝った日（５月２日）に位置付けられていたと考えられる。

3-2　聖キリアスと聖カラントクス

「豊作祈願祭」の日取りの枠内に祝日を持つドラゴン退治で知られる聖人のうち，パリ南東の町プロヴァン（Provins）の守護聖人キリアス（Quiriace）は特異な位置を占めている。キリアスはキリスト教に改宗したユダヤ人で，エルサレムの司教になったとされる聖人であり，十字軍兵士が1209年にコンスタンティノープルから持ち帰ったキリアスの聖遺物が，プロヴァンの参事会教会に安置されている[32)]。プロヴァンで行われてきた「豊作祈願祭」には，ドラゴン（Dragon）とトカゲ（Lézarde）という２種類の怪物が登場してきた。伝承によれば，かつてプロヴァンを荒廃させていたこの怪物たちを，聖キリアスが退治したのだという。

「豊作祈願祭」には，町の２つの教会から行列行進が出発し，聖キリアス参事会教会（Collégiale Saint-Quiriace）発の行列は彩色木製のドラゴンを持った鐘つき男が，ノートルダム＝デュ・ヴァル教会（Notre-Dame du Val）発の行列はトカゲの似姿を持った鐘つき男が先導した[33)]。怪物の似姿はいずれも動かすことのできる長いあごを持ち，リラや季節の花々で飾られていた。２つの行列が街中で出会うと，双方の鐘つき男がドラゴンとトカゲ

をぶつけ合い，飾り付けの花が多く残った怪物の勝利とされた。聖キリアスの祝日は５月４日であるため，彼が退治したとされるドラゴンとトカゲは，前章で取り上げた中世ウェールズの物語「スィッズとスェヴェリスの物語」に登場する，５月祭前夜に戦う２匹のドラゴンを想起させる[34)]。

「アーサー王伝説」との関連では，『聖カラントクス伝』（*Vita Carantoci*）（1100年頃成立）にもドラゴン退治の話が認められる[35)]。この聖人伝によると，ウェールズ・ケレディギオン出身のカラントクス（Carantocus）は，神から授かった美しい祭壇をセヴァーン川へ流し，祭壇が流れ着いた場所へ説教に向かおうとしていた。祭壇はアーサー（Arthur）とカト（Cato）が共同で統治するカッルム（Carrum）王国へ漂着したが，カラントクスが王国へ到着したときには，祭壇は持ち去られていた。国を荒らすドラゴンを追跡中のアーサーに出会ったカラントクスは，祭壇のありかを教えてもらうため，祈りを捧げてドラゴンを出現させる。恐るべき巨大なドラゴンは，従順にカラントクスの方へ進み，主人を前にした召使いのように頭を下げる。カラントクスはドラゴンの首の周りにストラをかけ，アーサーとカトの居城へ連れて行く。誰もがドラゴンを殺めようとしたが，カラントクスが異を唱え，ドラゴンに二度と姿を見せぬよう命じて追い払ったという。

聖人伝が意図したキリスト教的な解釈によれば，カラントクスによるドラゴン退治は，アーサーが具現する俗界に対する聖界の優越を表している。これに対し，「豊作祈願祭」の日取りの枠内に収まっているカラントクスの祝日（５月16日）に注目すれば，聖人の手なづけたドラゴンの祖型が，早春の作物に打撃を与える神獣であるという推測も成り立つだろう。

3-3　聖ゲオルギウスによるドラゴン退治

ドラゴン退治で最も有名なキリスト教の聖人は，ゲオルギウス（Georgius）（フランス語名ジョルジュ Georges，英語名ジョージ George）である。

ヤコブス・デ・ウォラギネが『黄金伝説』で伝えるバージョン[36]によると，カッパドキア（小アジア内陸部）出身の騎士ゲオルギウスが，リュビア（リビア）のシレナに立ち寄ったとき，町に悪疫を蔓延させていたドラゴンを退治し，くじで餌食に選ばれていた王の一人娘を救ったという。ゲオルギウスはディオクレティアヌス帝によるキリスト教徒大迫害の際，303年頃に殉教したと伝えられるが，その崇敬は次第に東方から西方へ広まり，11世紀頃にドラゴン退治の伝説が付加されたと推測される[37]。

ゲオルギウスの祝日（4月23日）が，「豊作祈願祭」の枠内に収まっている点は重要である。フランス中央部のサン＝プルサン＝シュル＝シウール（Saint-Pourçain-sur-Sioule）と，ブルゴーニュ地方のニュイ＝サン＝ジョルジュ（Nuits-Saint-Georges）という，いずれもワインで有名な2つの村が，ゲオルギウス（ジョルジュ）をブドウの守護聖人としているのは，彼の祝日がブドウにとって危険な晩霜の時期に対応しているからである[38]。そのためゲオルギウスが倒すドラゴンの祖型も，早春の農産物に危害を加えかねない神獣と言えるだろう[39]。

ドラゴンと乙女，および豊穣との関連については，古代ローマの詩人プロペルティウス（Propertius）（前50年頃－前16年頃）が『エレギア』（*Elegiae*）第4巻第8歌「キュンティアの怒り」の中で記している，次の一節が示唆的である。

Lanuvium annosi vetus est tutela draconis :
hic tibi tam rarae non perit hora morae ;
qua sacer abripitur caeco descensus hiatu,
qua penetrat (virgo, tale iter omne cave !)
ieiuni serpentis honos, cum pabula poscit
annua et ex ima sibila torquet humo.

talia demissae pallent ad sacra puellae,
cum temere anguino creditur ore manus.
ille sibi admotas a virgine corripit escas :
virginis in palmis ipsa canistra tremunt.
si fuerint castae, redeunt in colla parentum,
clamantque agricolae 'Fertilis annus erit.'[40)]

ラーヌウィウムは古くから，年を経た蛇（draco）の守りの町，ほかならぬここで，いとも珍らしい滞在の時間は空費されない。そこの神聖な斜面は，目の見えぬ大きな穴に裂かれていて，そこを下って（処女よ，このような道のすべてに気を付けよ）飢えた蛇（serpens）のお供えが入って行く，――蛇が年毎の餌を求めて，深い地底からしゅうしゅうと，口音を転がしてよこすときに。このような儀式に下りて行く乙女らは，無謀にも蛇の口に手を委ねるときに，青ざめる。蛇は処女から，自分の方に近づけられた餌をさらい，処女の掌の上で，籠さえも震える。汚れない身であれば，戻って両親の首にすがり，農夫らは「豊作の年だ」と叫ぶ[41)]。

この一節によると，ローマから南東に向かうアッピア街道沿いにあったラティウムの町ラーヌウィウム（Lanuvium）では，洞窟に棲み「年毎の餌」（'pabula annua'）を求めるドラゴン（蛇）の許へ，選ばれた処女がお供え物を届ける「儀式」（'sacra'）があった。ドラゴンが餌をさらい，処女が無事に帰還すれば，来たるべき年は豊作が約束されたという。

類例は，２世紀後半から３世紀にかけてローマで活躍したアイリアノス（ラテン語名アエリアヌス Aelianus）がギリシア語で著した『動物の特性について』（*Peri zoon idiotetos*）第11巻16章にも見つかる。それによると，ラーヌウィウムの聖なる森に大きな洞窟があり，毎年決まった日が来ると，目

隠し布をつけた処女がお菓子を手に洞窟の中へ入った。洞窟に棲むドラゴンは，清き身の娘が持つお菓子には近づき，身を持ち崩した娘が持つお菓子には手をつけなかったという[42)]。また同書第11巻２章には，エペイロス（イオニア海沿岸地域）にあるアポロンに捧げられた森に棲むドラゴンたちに，巫女が食べ物を届ける祭礼への言及が見つかる。ドラゴンたちがその食べ物を受け取れば，病なき豊穣の年になる前兆であり，受け取らなければ災いの年になると，エペイロスの人々が考えたという[43)]。以上のようにプロペルティウスやアイリアノスが語る，処女がドラゴンに供え物を届ける「儀式」には，ドラゴン退治を行う英雄が不在であるが，洞窟に棲むドラゴンと町の豊穣との関連は明示されている[44)]。そのためこの「儀式」が早春の頃（「豊作祈願祭」の時期）に挙行された可能性は十分にあるだろう。

４．三重の戦い

前章では「豊作祈願祭」の行進に登場するドラゴンの祖型が，これを退治する聖人の祝日を根拠に，早春の作物を襲う神獣である可能性を探ってきた。『荷車の騎士』3530-37行に言及のある，ログル王国の乙女たちによる断食と祈願行進が，こうしたドラゴンを祖型に持つ「豊作祈願祭」の残映であるとすれば，３日という断食と祈願行進の日数は，インド＝ヨーロッパ神話の神々や英雄が倒す怪物の３つ首に由来すると考えられる。こうした神話的文脈によれば，「キリスト昇天祭」に王妃グニエーヴルを誘拐したメレアガンは，インド＝ヨーロッパ神話の３つ首怪物に相当する。本章では，メレアガンの祖型として３つ首怪物を想定し，傍証となるインド＝ヨーロッパ神話が伝える様々な異本の検討を行う。

4-1　３つ首怪物との戦い

ヴェーダ神話（古代インド）のインドラが退治した蛇ヴリトラは３つ首

だと記されてはいないが，後代に成立した『マールカンデーヤ・プラーナ』（*Markandeya Purana*）第５歌によると，息子の３つ首怪物をインドラによって殺害されたトヴァシュトリ（Tvashtri）が，激怒して苦行僧のまげを捧げ物として火の上に置いたところ，そこからヴリトラが出現したことになっている[45)]。ヴリトラは「アヒ」（ahi）（「蛇」の意）とも呼ばれたが，これに対応する「アジ」（azhi）が，古代イランのゾロアスター教の経典『アヴェスター』（*Avesta*）に登場する。それは，最高神アフラ・マズダー（Ahura Mazda）の被造物を破壊するために，悪魔の主アンラ・マンユ（Angra Mainyu）が創造したアジ・ダハーカ（Azhi Dahaka）である。このドラゴンを退治した英雄スラエータオナ（Thraetaona）について，『ワルフラーン・ヤシュト』（*Warharan Yasht*）第14節40は，「彼は，３口あり，３頭を有し，６眼の，千術を有する，最強にして魔性のダハーカ竜を征伐したる者」[46)] と述べている。したがって，アジ・ダハーカは３つ首のドラゴンである。

神話上のアジ・ダハーカは，時代が下ると人間として描かれるようになり，イランの国民詩人フェルドウスィー（Ferdowsi）（934年頃-1025年頃）の『王書（シャー・ナーメ）』（*Sah namah*）には，蛇王ザッハーク（Zahhak）の姿で登場する[47)]。悪魔に欺かれて王位を簒奪したザッハークは，両肩にそれぞれ蛇がついており，２匹の蛇を養うために毎日２人の人間が殺され，その脳みそが与えられていた。鍛冶屋カーヴェ（Kaveh）は18人の息子たちの中の17人を，この蛇王のために亡くしていた。そこでカーヴェは民衆蜂起を組織し，若王フェリドゥーン（Feridun）を探し出す。やがてフェリドゥーンは牛頭の槌矛を手にし，カーヴェを先頭に立てて軍を進め，ザッハークを倒す。両肩から２匹の蛇が生えていたザッハークは，英雄に征伐される３つ首怪物の役割を演じているのである。

ギリシア神話では，最大の英雄ヘラクレス（Herakles）が名高い「12功

業」（Dodekathlos）の10番目で倒すゲリュオン（Geryon）が３つ首怪物であった。ヘラクレスはゲリュオンが所有する牛を奪うために，オケアノスの流れに近いエリュテイア（Erytheia）の島まで進んだという[48)]。これに対して北欧神話では，怪力を誇る雷神トール（Thorr）と，巨人フルングニル（Hrungnir）との決闘[49)]が注目される。なぜならフルングニルは，固い石でできた角が３つある心臓を持っていたからである。トールが投げつけた槌に頭蓋骨を割られて息絶えるフルングニルは，角が３つある心臓により，３つ首怪物の仲間に加えることができる。

アイルランドの地名の由来を語る地誌『ディンドヘンハス』（*Dindsenchas*）（９世紀 -12世紀頃）が伝える，３つの心臓を持つ存在も同じ怪物の仲間である。フランス・レンヌ（Rennes）の図書館所蔵の写本が収録する『ディンドヘンハス』第13節[50)]によると，戦闘女神モリーガンの息子メヘ（Meche）は３つの心臓を持ち，それは３匹の蛇が交差した形をしていた。このメヘを倒したのはマク・ケーフト（Mac Cécht）[51)]であり，メヘが生き長らえていれば，彼の中の蛇たちが大きくなり，アイルランドの人々を滅ぼしていた可能性があった。マク・ケーフトがメヘの心臓を焼き，その灰を川に投げ入れたところ，川が沸騰してすべての魚が死んでしまったと，この地誌は伝えている。

4-2　三重の敵との戦い

ここまで，インド＝ヨーロッパ神話の神々や英雄が３つ首怪物を倒すという筋書きを検討してきたが，怪物の首の数である「３」は，神々や英雄に敵対する相手の数や，戦いの期間・回数に反映されることもある。その典型例はデュメジルが詳細に検討した，古代ローマのホラティウス３兄弟（Horatii）の末弟とクリアティウス３兄弟（Curiatii）との戦いである[52)]。ローマ第３代目の王トゥッルス・ホスティリウス（Tullus Hostilius）の時代

に，農地の統治権をめぐってローマとアルバ・ロンガ（Alba Longa）の間に争いが持ち上がり，双方の陣営から３つ子の兄弟が代表として選ばれる[53]。戦いが始まると，ローマを代表するホラティウス３兄弟の長男と次男が倒れるが，残された３男プブリウス（Publius）が単独で，アルバを代表するクリアティウス３兄弟を順に討ち取っていく[54]。この戦いでは，クリアティウス３兄弟が神話上の３つ首怪物に相当することになる。またこの筋書きは，３兄弟の末子が兄たちの失敗した試練に成功するという，世界中の民話に馴染みの末子成功譚を踏襲したものである[55]。

ケルト文化圏では，アイルランド神話で最も重要な英雄クー・フリン（Cú Chulainn）[56]が，幼年時代に見せた偉業の１つに類例が見つかる。『クアルンゲの牛捕り』（*Táin Bó Cuailnge*）（３つの版が現存し，古い版は1100年頃の写本『赤牛の書』に収録）によると，クー・フリンは７歳のとき，「自分たちが殺したアルスター戦士の数が，今生きているアルスター戦士の数よりも多い」と自慢していた，ネフタ（Nechta）の３人息子を順番に一騎討ちで倒し，それぞれの首を刎ね，戦利品として持ち帰る[57]。フォイル（Foill）（「悪賢児」），トゥアヘル（Tuachell）（「逃げ上手」），ファナル（Fanall）（「燕」）という名のネフタの３人息子は，先述した古代ローマ神話のクリアティウス３兄弟に相当する。

「アーサー伝承」に類例を求めれば，ウィリアム・オヴ・マームズベリ（William of Malmesbury）（1095-1143年）が1130年代に執筆した『グラストンベリ修道院古史』（*De Antiquitate Glastoniensis Ecclesiae*）のいわゆる「改竄本」[58]中，「高名なるアーサーの偉業」（‘in gestis illustrissimi regis Arturi’）と題された一節が伝える，ヌート（Nuth）の息子イデール（Ider）の武勇伝が想起される[59]。それによると，カーリアンの都に滞在中のアーサー王が，ある年のクリスマスの日に，若き騎士イデールの武勇を試すため，「蛙の山」（‘montem ranarum’）に連れて行く。グラストンベリ近郊にあり，当時

ブレント＝ノウル（Brent Knoll）と呼ばれたこの山で，イデールは３人の恐るべき凶悪な巨人たちに挑み，死力を尽くしてこれを殺めたという。この伝承では，イデールの倒す３人の巨人が，神話上の３つ首怪物に対応する。

以上の諸例から，インド＝ヨーロッパの神々や英雄が対決を挑む３つ首怪物は，神々や人間の世界にとって恐るべき脅威であり，これを１柱の神や１人の英雄が退治することは，共同体全体の解放につながる偉業となっていたことが分かる。『荷車の騎士』の筋書きでは，ゴール国王子メレアガンによる王妃グニエーヴルの誘拐は，アーサーが支配するログル王国の存立を危うくする出来事であり，ランスロによるメレアガン征伐は王国全体の解放につながったことが思い出される。さらにもう１つ留意すべき点は，３つ首怪物（あるいはそれに相当する存在）との戦いが，英雄の属する共同体から離れた場所で繰り広げられている点である。クー・フリンがネフタの３人息子を倒したのは，アルスターの国境を越えた異境であったし，グリョートトゥーナガルザル（Grjóttúnagarðar）で行われたトールと巨人フルングニルとの決闘は，「国境で」（‘at landa maeri’）のことだった。これと同じように，ランスロとメレアガンの最初の決闘が繰り広げられたのは，「異界」に他ならないゴール国でのことだった。

4-3　戦いに要する期間や回数

ここまでの検討から，インド＝ヨーロッパ神話の神々や英雄が，共同体にとっての災厄である怪物と戦うという筋書きでは，怪物自体が３つ首であるケースと，怪物が３重化するケースを確認した（古代インドのヴェーダ神話の例を念頭に置けば，３つ首の方が古い形態だと考えられる）。こうした筋書きではさらに，「３」という数字が敵との戦いに要する期間や回数に現れてくることがある。

神々や英雄による怪物退治を伝えるインド＝ヨーロッパの神話が，形を変えて民話の中にも継承されているとすれば，アンティ・アールネ（Anti Aarne）とスティス・トンプソン（Stith Thompson）による民話の国際話型AT 300「７つ首の獣」（La Bête à sept têtes）に属する話群が重要な意味を持ってくる[60]。なぜなら，犬を連れた英雄が怪物の７つ首（または３つ首）を斬り落とすのに３日かかるケースが多いからである。さらに，主人公が怪物の持つ複数の首を刎ねるのに，少なくとも３度，剣や刀を振り下ろすのが必要なケースも多い[61]。

インド＝ヨーロッパ戦士の通過儀礼の筋書きを留めるルーマニアの歌謡（バラッド）の中に，３兄弟の末子コピル＝ロマン（Copil-Roman）の活躍を歌う作品群がある[62]。「コピル」は「子供」を意味し，歌謡には12歳や15歳の少年として登場する。ロマンが活躍する歌謡には様々な異本があるが，筋書きは同工異曲であり，その発端では彼が２人の兄ディン（Din）とコンスタンティン（Constantin）とともに食卓でご馳走にありついていたときに，トルコ軍来襲の知らせを受ける。ディンは末弟のロマンに，敵軍が５千人から６千人であれば１人で立ち向かい，１万人から１万５千人であれば助けを求めるように言って送り出す。実際にはトルコ軍は２万人を数えたが，ロマンは単独で迎え撃つことにする。３日３晩経ってもコピル＝ロマンが戻らなかったため，２人の兄が戦地へ向かうと，あまりにも多くのトルコ兵を倒したロマンは憤怒に捕われたままだったという。ロマンは，３日３晩，朝から晩まで，トルコ軍を相手に孤軍奮闘していた。こうしたコピル＝ロマンの姿は，ネフタの３人の息子を倒した後も憤怒が冷めやらぬクー・フリンの姿を髣髴とさせる。

本章で行った諸例の検討から，インド＝ヨーロッパ世界では，戦神や戦士の敵となる怪物の「三重性」（triplicité）は，様々な形を取ることを確認

した。古代インドのトヴァシュトリの息子，古代イランのアジ・ダハーカ（および『王書』の蛇王ザッハーク），古代ギリシアのゲリュオンのような「３つ首」のケース，マク・ケーフトが倒したメヘのような「３つの心臓」のケース，トールが倒した巨人フルングニルのような「３つの角のある心臓」のケース，ホラティウス兄弟の末子が倒したクリアティウス兄弟や，クー・フリンが倒したネフタの息子たちのような「３兄弟」（または「3つ子」）のケースなどが認められた。こうしたインド＝ヨーロッパの神話伝承の中へ『荷車の騎士』を置き直してみると，主人公のランスロと「３度」戦い[63)]，最後の決闘で首を刎ねられるメレアガンは，まさしく戦神や戦士が倒す「３つ首」怪物の役割を演じていると言えるだろう。

5．終わりに

『荷車の騎士』の骨格をなす王妃誘拐のテーマは，北イタリア・ロンバルディアにあるモデナ大聖堂の正面・北側面扉口上部の浮彫（1120年頃の作）に早くも見つかるが，そこにはランスロの姿は見つからず，アーサー自身が戦友たちとともに王妃の救出を目指している[64)]。こうした筋書きはラテン語による聖人伝にも認められ，カラドク・オヴ・スランカルヴァン（Caradoc of Llancarfan）の『ギルダス伝』（*Vita Gildae*）（12世紀前半）では，「夏の国」サマセットのメルワース（Melvas）王に誘拐された王妃を，アーサーが取り戻している。こうした筋書きの背景にあるのは，初夏の頃に冥界の王が天界の王と大地女神を奪い合うという神話である[65)]。クレティアン・ド・トロワは，こうした神話的な筋書きにトルバドゥール（南仏詩人）が称揚した「至純愛」のテーマを結合させて作品を創作したと考えられてきた[66)]。不倫関係にあった王妃グニエーヴルの意向通りに行動するランスロは，「宮廷風恋愛」を具現する騎士である。

こうした従来の解釈に対し，ログル王国の乙女たちによる「３日間」の

断食と祈願行進への言及（『荷車の騎士』3530-37行）を契機に本稿で試みたのは，季節神話とインド＝ヨーロッパ戦士の通過儀礼に依拠した解釈である。このうち，季節神話的な解釈にとって最大の鍵となるのは，物語の冒頭に出てくる「キリスト昇天祭」という時間標識であり，乙女たちによる断食と祈願行進は「豊作祈願祭」（「キリスト昇天祭」直前３日間に行われる祭り）を示唆している。一方で，ランスロが「３度」戦うことになるメレアガンは，物語の古層ではインド＝ヨーロッパ神話に馴染みの「３つ首」怪物に相当するため，ランスロによるメレアガン退治は，インド＝ヨーロッパ世界で「第２機能」（戦闘性・力強さ）を具現する戦神や戦士が行う通過儀礼のシナリオを踏襲したものだと言えるだろう。このように『荷車の騎士』を神話学的な観点から読み直すと，冥界を思わせるゴール国の王子メレアガンは，戦士の通過儀礼の途上にあったランスロの前に立ちはだかる「３つ首」怪物であると同時に，早春の時期に作物を襲う神獣としての「豊作祈願祭」のドラゴンをも兼ね備えた存在となってくる。

アーサーが支配するログル王国の人々のみならず，早春の農産物にとっての脅威でもあったメレアガンを，ランスロが３度目の戦いで征伐するという『荷車の騎士』の筋書きの中では，ランスロを荷車に乗せてメレアガンの待つゴール国へと案内する「小人」の役割についても再考の余地がある。この小人の役割は，フランス・ブルターニュの伝承に馴染みの「死の車」を曳く死霊アンクー（Ankou）[67] のような，現世と異界を繋ぐ霊魂導師のみに還元できないように思われる。この問題を掘り下げるには，ヴェーダ神話のインドラによる３つ首怪物退治に立ち返る必要がある。デュメジルが指摘するように[68]，『タイッティリーヤ・サンヒター』（*Taittiriya Samhita*）II, 1, 1などの文献によると，３つ首怪物を大地に叩きつけたインドラは，身体から力が抜け出てしまったかのようになり，怪物にとどめを刺すことができなくなる。そこでインドラは，肩に斧をかつい

で偶然通りかかった大工を呼びとめ，助力を願い出る。すると大工は，いつも木材に対して行っているように斧を振り下ろし，怪物の３つ首をいとも簡単に刎ねてしまう。ところが話はそこで終わらなかった。３つ首はいずれも中が空洞になっており，それぞれの首から，ライチョウ，スズメ，シャコが飛び出してきたという。

３羽の鳥を中に含んでいた３つ首の切断が，怪力を誇るはずの「戦神」ではなく「大工」の手に委ねられるというこの伝承は，３つ首怪物退治の完遂に「職人」の用いる専門的な技術が不可欠であることを示唆している。したがって，インドラが倒した３つ首怪物が，「技工神」（トヴァシュトリ）の息子であるのも偶然ではない。３つ首怪物はいわば，「技工神」の「作品」なのである。こうした推測が正しければ，アイルランドの英雄クー・フリンが倒したネフタの３人息子の中に，「燕」を意味するファナル（Fanall）が含まれていたのも偶然ではないだろう。ケルト文化圏では一方で，文献資料を残さなかったガリア（「大陸のケルト」）にも，英雄による３つ首怪物退治を語る神話が存在したことを推測させてくれるのが，パリのノートルダム大聖堂の下から発見された装飾柱である。パリの船乗りたちがユピテル神に奉献したこの柱の一角には，木の幹を左手でしっかりと掴み，木の枝を打ち落とすために右手で小刀を振り上げる木こり姿のエスス（Esus）が彫られており，その右側の一角には１頭の牛と３羽の鶴（タルウォス・トリガラヌス Tarvos trigaranus）が認められる[69]。この図柄（写真２）が表しているのは，「技工神」としてのエススが刎ねた怪物の３つ首から３羽の鳥が飛び出した場面なのかもしれない[70]。いずれにしても，３つ首と３羽の鳥は，怪物退治と技工神（またはそれに相当する存在）との密接な関連を示唆しているのである。

同じ神話学的な観点に立つと，先述したフェルドウスィー作『王書』が伝える，フェリドゥーンによる蛇王ザッハーク征伐は重要な意味を持って

（出所）筆者撮影

写真２　エスス（左）とタルウォス・トリガラヌス（右）
（パリ・クリュニー中世美術館所蔵）

くる。なぜなら，ザッハークに対する民衆蜂起を指揮したのは，「鍛冶屋」のカーヴェだったからである。以上の筋書きを『荷車の騎士』に重ね合わせると，ゴール王国までランスロを荷車に乗せてメレアガンの許まで運んでいく「小人」は，フェリドゥーンをザッハークの許へ導くカーヴェと同じく，神話上の「鍛冶屋」に相当することになる[71]。一方で同じ「小人」に，インドラに代わって怪物の３つ首を刎ねた「大工」の属性が備わっていたとすれば，物語の古層ではランスロがメレアガンとの３度目の戦いを優勢に運んだとき，メレアガンにとどめを刺す役割を「小人」が担っていたのかもしれない。

注

1） 拙稿「《短詩》から《ロマン》へ」（中央大学『人文研紀要』第50号，2004年）73–100頁，および拙稿「《ブルターニュの短詩》に見られる《口承性》をめぐる考察」（中央大学人文科学研究所編『ケルト　口承文化の水脈』中央大学出版部，2006年）第1部第4章を参照。

2） 拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説—修辞学的研究から神話学的研究へ』（中央大学出版部，2002年）を参照。

3） 本稿での『イヴァン』の引用には，ガリマール出版から1994年に刊行されたプレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』（Poirion, D. (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, 1994）所収，カール・D・ウイッティ（K.D. Uitti）による校訂本を用いる。

4） Zumthor, P., *Introduction à la poésie orale*, Paris : Seuil, 1983 ; *La lettre et la voix*, Paris : Seuil, 1987.

5） 『イヴァン』の冒頭には，主人公の従兄弟にあたる騎士カログルナン（Calogrenant）が王妃に求められ，かつて経験した己の失敗談を騎士たちの前で披露する場面が出てくる。話を始めるにあたってカログルナンが騎士たちに求める姿勢はまさしく，「ロマン」の朗読を聞く聴衆にも当てはまる。カログルナンによる前置きは次の通りである。「お妃さまのお気に召すのでしたら，さあ聞いて下さい。心と耳を私に向けて下さい。言葉は心で理解されなければ，全く失われてしまうからです。物事を聞きながらも理解しないで，そのくせそれを称えるような人たちがいます。そういう人たちは，心がそれを理解していないのだから，ただ聞いているだけです。言葉は耳にやって来ます，丁度風が吹きつけるように。しかし言葉は立ち止まらず，留まることもない。心がしっかりと注意していて，とらえる準備ができていなければ，むしろ立ち去ってしまう。聞いているときに言葉をとらえ，閉じ込めて引き留められるのなら，耳はそこを通って声が心に届く道となるからです。心は腹の中で，耳を通って入ってくる声をとらえます。だからこれから私の話を理解しようとする人は，心と耳を私に委ねるべきです。私は夢や作り話や嘘を話すつもりはないからです。」（“Des qu’il vos plest, or escotez ! / Cuers et oroilles m’aportez, / Car parole est tote perdue / S’ele n’est de cuer entandue. / De cez i a qui la chose öent / Qu’il n’entandent, et si la löent ; / Et cil n’en ont ne mes l’oïe, / Des que li cuers n’i entant mie. / As oroilles vient la parole, / Ausi come li vanz qui vole, / Mes n’i areste ne demore, / Einz s’an part en mout petit d’ore, / Se li cuers n’est si esveilliez / Qu’au prendre soit apareilliez ; / Car, s’il le puet an son oïr / Prendre, et

anclorre, et retenir, / Les oroilles sont voie et doiz / Par ou s'an vient au cuer la voiz ; / Et li cuers prant dedanz le vantre / La voiz, qui par l'oroille i antre. / Et qui or me voldra entandre, / Cuer et oroilles me doit randre, / Car ne vuel pas parler de songe, / Ne de fable, ne de mançonge.", vv. 149–172）

6） 邦訳は，ロマン・ヤコブソン（桑野隆・朝妻恵理子編訳）『ヤコブソン・セレクション』平凡社，2015年，181–243頁。ヤコブソンによるとコミュニケーションには，送り手（addresser），受け手（addressee），メッセージ（message），コンテクスト（context），コード（code），接触（contact）という６つの構成要因があり，それぞれに異なる言語機能が対応している。その言語機能は順に，主情的（emotive）機能，動能的（conative）機能，詩的（poetic）機能，指示的（referential）機能，メタ言語的（metalingual）機能，交話的（phatic）機能である。

7） 本稿での『荷車の騎士』の引用には，前掲書・プレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』所収，ダニエル・ポワリヨン（Daniel Poirion）による校訂本を用いる。ポワリヨンは作品の校訂にあたり，写字生ギヨ・ド・プロヴァン（Guiot de Provins）によるフランス国立図書館794番写本（13世紀前半）を基底写本とし，同図書館1450番写本（13世紀前半）を調整準拠写本に用いている。ちなみに『フランス中世文学集２』（白水社，1991年）所収，神沢栄三による邦訳（クレチアン・ド・トロワ『ランスロまたは荷車の騎士』）は，フランス国立図書館12560番写本（13世紀中頃）を基底写本にしたヴェンデリーン・フェルスターによる校訂本（Foerster, W., *Der Karrenritter und das Wilhelmsleben von Christian von Troyes*, Halle : Niemeyer, 1899）に依っている。

8）『荷車の騎士』に張りめぐらされた時間標識については，フィリップ・ヴァルテールが作成した一覧を参照（Walter, P., *La Mémoire du temps. Fêtes et calendriers de Chrétien de Troyes à* La Mort Artu, Paris : Champion, 1989, pp. 102–105）。

9） フェルスターの校訂本によると，アーサー王は「キリスト昇天祭」に，カルリヨン（'Carlion', v. 32）を後にしてカマアロ（'Camaalot', v. 34）へ行き，宮廷を開いたことになっている。カルリヨンはクレティアンの遺作『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』（*Perceval ou le Conte du Graal*）（1182–83年頃）にもアーサー王の居城の１つとして名が挙がるが，カマアロの名が本格的に登場するようになるのは，13世紀の古フランス語散文「聖杯物語群」以降である。したがってフランス国立図書館12560番写本の写字生は，「聖杯物語群」の中で最も早く成立した『ランスロ本伝』（*Lancelot propre*）（1215–25

年頃）からカマアロの名を借用したのかもしれない。ちなみにクレティアン作『聖杯の物語』続編群のうち，マネシエ（Manessier）による『第３続編』（*Troisième Continuation*）（1220年頃）には「カマアロ」の名が２種類の綴り（‘Camaalot’, v. 33270 ; ‘Kamaalot’, v. 39993 et v. 40177）で現れ（Toury, M.-H. (éd.), Paris : Honoré Champion, 2004），13世紀後半に書かれた作者不詳の『双剣の騎士』（*Le Chevalier as deus espees*）では「カマアロ」が「カムロ」（‘Kamelot’, v. 2609）と「ガマラオ」（‘Gamalaot’, v. 6053）という２つの綴りで現れる（Rockwell, P. V. (éd.), Woodbridge : D.S. Brewer, 2006）。

10） たとえば，ランスロが２人のお供を連れて「剣の橋」へ向かう場面は，「３人は日暮れまで一本道を進んで行き，９時課を過ぎて晩課の頃に《剣の橋》に到着した」（“Le droit chemin vont cheminant / Tant que li jorz vet declinant, / Et vienent au Pont de l’Espee / Aprés none vers la vespree.”, vv. 3009-3012）と記されている。

11） Paris, G., « Lancelot du Lac, II. Le *Conte de la Charrette* », *Romania*, 12, 1883, pp. 459-534 (ici, p. 475 note 1).

12） *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, *op. cit.*, p. 1280 (note 4 à propos de la p. 593).

13）「赤褐色の月」をめぐる伝承については，ベルナール・クーセの著作（Coussée, B., *Le mystère de la lune rousse*, Raimbeaucourt, 1996）を参照。

14） 本稿で「豊作祈願祭」と呼ぶ祭りは，「小リタニア祭」（リタニア・ミノール Litania Minor），「ガリア系リタニア Gallicana」とも呼ばれていた。祈願祭にはまた，４月25日に固定された「大リタニア祭」（リタニア・マヨール Litania Maior）（別名「ローマ系リタニア Romana」）も存在した。「大リタニア祭」はローマ教皇大グレゴリウス（グレゴリウス１世）が590年頃に導入した祭りである。２種類のリタニア祭については，保坂高殿『ローマ史のなかのクリスマス　異教世界とキリスト教１』（教文館，2005年）終章を参照。

15） ヤコブス・デ・ウォラギネ（前田敬作・山口裕訳）『黄金伝説２』人文書院，1984年，201-205頁。

16） フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）『中世の祝祭　伝説・神話・起源』原書房，2007年，175頁。

17） 中野節子訳『マビノギオン　中世ウェールズ幻想物語集』JULA 出版局，2000年，150-156頁。毎年，重要な季節の変わり目に繰り広げられた２匹のドラゴンの戦いが，カオスからコスモスへ向かう原初的な戦いの儀礼的な再現だという解釈もある。それによると，ドラゴンの戦いの舞台となる

ブリテン島の中心は，世界の中心（オンファロス）としての含意を持ってくる（Stalmans, N., *Les affrontements des calendes d'été dans les légendes celtiques*, Bruxelles : Ollodagos, 1995, p. 73）。

18） この筋書きは，ロベール・ド・ボロン（Robert de Boron）作『メルラン』（*Merlin*）（1210年頃）に見られる，ヴェルティジエ（Vertigier）の塔のエピソードを想起させる。それによると，ブリタニアで王位を簒奪したヴェルティジエが，防衛のために塔の建設を試みるが何度も失敗する。その原因は，塔を建てる土地の地下に水たまりがあり，そこにいた赤と白のドラゴンが戦いを繰り広げたためだった。この物語では，２匹のドラゴンが戦う時期が記されてはいないが，元来この戦いは季節神話的な性格を備えていたと考えられる。邦訳はロベール・ド・ボロン（横山安由美訳）『魔術師マーリン』（講談社学術文庫，2015年）を参照。

19） デュメジルは，２匹のうちの一方が不毛をもたらす叫び声を上げるドラゴンの戦いを，「雷雨の戦い」（orage-bataille）を伝える古い神話を脚色したものだと想定した（Dumézil, G., *Mythe et épopée*, I, Paris : Gallimard, 1968, p. 614, n. 3）。

20） 辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫，1970年，150-185頁。

21） 邦訳は，マリ＝フランス＝グースカン（樋口淳訳）『フランスの祭りと暦―５月の女王とドラゴン』原書房，1991年。

22） フランスとベルギーに伝わるドラゴン退治で知られる聖人を80人以上検討したベルナール・セルジャンによると，こうしたタイプの聖人の祝日は５月に限らず，ケルトの４つの大祭（11月１日のサウィン祭，２月１日のインボルグ祭，５月１日のベルティネ祭，８月１日のルグナサド祭）の周辺に集中しているという（Sergent, B., «Saints sauroctones et fêtes celtiques », *Cahiers internationaux de symbolisme*, 86-87-88, 1997, pp. 45-69）。

23） Privat, J.-M. (dir.), *Dans la gueule du dragon*, Sarreguemines : Editions Pierron, 2000, p. 9.

24） Chazan, M., «Le dragon dans la légende de saint Clément, premier évêque de Metz », Privat, J.-M. (dir.) , *op. cit.*, pp. 17-35 (ici, pp. 17-18).

25） Ibid., pp. 19-20.

26） セビリヤのイシドルス（560年頃-636年）は，その『語源』（*Etymologiae*）第12巻４で「ドラコー（ドラゴン）はすべての蛇の中で，あるいは地上にいるすべての動物の中で最も大きい」（'Draco maior cunctorum serpentium, siue omnium animantium super terram'）と述べている（André, J. (éd.), Isidorus Hispalensis, *Etymologiae*, XII, Paris : Les Belles Lettres, 1986, p. 135）。

27） Serpieri, C., *Graouilly, images et légendes du fameux dragon de Metz, autour du manuscrit n.5227 de la bibliothèque nationale de l'Arsenal,* Metz : Hisler-Even Libraire/Serge Domini Editeur, 1998.

28） Ibid., p. 115 (Ms Arsenal 5227, f. 30 r).

29） Ibid., p. 114 (Ms Arsenal 5227, f. 29 v). 美術史家ルイ・レオーも，聖クレマンの祝日を11月23日としている（Réau, L., *Iconographie de l'art chrétien*, t. III (Iconographie des saints)- I (A-F), Paris : Presses Universitaires de France, 1958, p. 323）。

30） Serpieri, C., *op. cit.*, p. 123 (Ms Arsenal 5227, f. 33 r).

31） De Westphalen, R., *Petit dictionnaire des traditions populaires messines*, Metz, 1934, col. 317-323. 当初は簡素だったはずのグラウリ像が，後に複雑な姿を取るようになったことは，16世紀の作家フランソワ・ラブレー（François Rabelais）の証言からも推測できる。1546年のメッス滞在中に「豊作祈願祭」のグラウリを目撃したラブレーは，『第４の書』（*Quart Livre*）第59章でガストロラートル族（Gastrolatres）が掲げていたマンデュース（Manduce）という彫像を，グラウリになぞらえながらこう説明しているからである。「それは，子供たちがこわがるような，化け物じみていて，こっけいで，ぞっとするほど醜い人形であり，その目は腹よりも大きく，頭は身体の残りの部分よりも巨大であって，上下に歯がずらっと並んだ，広くて，大きくて，こわそうなあごがはまっていた。そして，金ぴかの竿のなかに隠されたひもの仕掛けで，かちんかちーんと，おそろしい音を立てながら，上下の歯がぶつかるのだった」（ラブレー，宮下志朗訳『第４の書』ちくま文庫，2009年，484頁）。

32） Réau, L., *Iconographie de l'art chrétien*, t. III (Iconographie des saints)-III(P-Z), Paris : Presses Universitaires de France, 1959, pp. 1129-1130.

33） Gabet, P., « Les Dragons processionnels sont-ils ou non bénéfiques ? », *Bulletin de la Société de mythologie française*, 92, 1974, pp. 16-46 (ici, p. 23). フランスの民俗学者アンリ・ドンタンヴィルによると，２種類の怪物の似姿は毎年焼かれ，聖アユール（Ayoul）の泉に沈められることになっていた。プロヴァンの「豊作祈願祭」では1761年からドラゴンとトカゲが姿を消したが，それは両者の儀礼上の戦いが慎みを欠くようになったためだとされる（Dontenville, H., *Histoire et géographie mythiques de la France*, Paris : G.-P. Maisonneuve et Larose, 1973, pp. 28-29）。

34） Walter, P., *La Mémoire du temps*, *op.cit.*, p. 562.

35） Faral, E., *La légende arthurienne*, t. 1, Paris : Honoré Champion, 1929,

pp. 241-242. ウェールズで中世期にラテン語で書かれた聖人伝に登場するアーサーについては，森野聡子「ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ」（中央大学人文科学研究所編『アーサー王物語研究　源流から現代まで』中央大学出版部，2016年，33-80頁）のうち，43-47頁を参照。

36） ヤコブス・デ・ウォラギネ，前掲書『黄金伝説２』，75-88頁。

37） ゲオルギウスが倒すドラゴンは王女を貪り喰う寸前であったが，こうした筋書きはギリシア神話のペルセウス（Perseus）の武勇伝にも見つかる。それによると，海神ポセイドンが送ってきた怪物によりエティオピアが荒廃したため，王が神託により娘のアンドロメダ（Andromeda）を人身御供にすることを強いられたのが発端だった。ペルセウスはゴルゴン退治の帰途に，海辺の岩に鎖で縛られたアンドロメダの姿を認め，怪物を退治して彼女を妻にする。ルネサンス期以降，この海の怪物はドラゴンとして描かれることが多いが，古代世界では海獣ケートス（cetus）だった。ケートスについては，金沢百枝「古代地中海の怪物ケートスの系譜とドラゴンの誕生―ジローナの《天地創造の刺繍布》における２匹の怪獣に関する一考察」（『地中海学研究』第24号，2001年，３-24頁），および金沢百枝『ロマネスク美術革命』新潮社，2015年，第５章「海獣たちの変貌」を参照。

38） Baudoin, J., *Grand livre des saints. Culte et iconographie en Occident*, Nonette : Editions Créer, 2006, pp. 240-243 (ici, p. 241).

39） ポール・ヴェルディエは，ドラゴンを自らの地位に留まり続けようとする「老王」，これを倒して王女（「支配権」の象徴）を救うゲオルギウスを「新王」の象徴と解釈している（Verdier, P., « Les Monstres et les Saints saurochtones », *Bulletin de la Société de mythologie française*, 158, 1990, pp. 29-36）。

40） Butler, H. E. (ed. and trad.), *Propertius*, London : W. Heinemann ; Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press (Loeb Classical Library), 1912, p. 314.

41） 中山恒夫編訳『ローマ恋愛詩人集』国文社，1985年，418頁。なおプロペルティウスについては，国原吉之助「プロペルティウスの詩と真実」（『名古屋大学文学部20周年記念論集』，1968年，721-745頁）を参照。

42） Zucker, A. (trad.), Elien, *La personnalité des animaux*, II, Paris : Les Belles lettres, 2002, pp. 46-47.

43） Ibid., p. 38.

44） Gabet, P., art. cité, p. 36.

45） ジョルジュ・デュメジル（高橋秀雄・伊藤忠夫訳）『戦士の幸と不幸』，

『デュメジル・コレクション４』ちくま学芸文庫，2001年，318–319頁。

46） 岡田明憲『ゾロアスター教　神々への讃歌』平河出版社，1982年，293頁。アジ・ダハーカについては，岡田明憲『ゾロアスター教の悪魔払い』平河出版社，1984年，61頁を参照。スラエータオナの名は，「第３の者」を指すアヴェスター語「スリタ」（Thrita）に由来する。

47） フェルドウスィー（岡田恵美子訳）『王書』岩波文庫，1999年，41–69頁。『王書』については，ハミッド・ネジャット（渡邉浩司訳）「ザラスシュトラの教えとペルシア文化への影響―フェルドウスィーの『王書』を例に」（中央大学『仏語仏文学研究』第38号，2006年，205–219頁）を参照。

48） 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店，1960年，122頁。

49） 菅原邦城『北欧神話』東京書籍，1984年，140–143頁。決闘に先立ち，トールの召使いがフルングニルの前に現れ，トールは地下から攻撃してくると述べる。この言葉を信じたフルングニルが盾を大地に置いたところ，トールは空から現れてフルングニルを倒す。このように決闘で敵を欺く技の習得は，インド＝ヨーロッパ戦士の通過儀礼の一部である。この問題については，吉田敦彦のフランス語による論考を参照（Yoshida, A., « Le combat contre l'adversaire triple et l'*apatê* », Vigneron, F. et Watanabe, K. (dir.), *Voix des mythes, science des civilisations*, Peter Lang, 2012, pp. 57–60）。

50） Stokes, W., « The Prose Tales in the Rennes Dindsenchas », *Revue celtique*, 15, 1894, p. 304.

51） 11世紀に編纂された『アイルランド来寇の書』（*Lebor Gabála Érenn*）によると，マク・ケーフト（「犂の刃の息子」）は，トゥアタ・デー・ダナン族の３人の王のうちの１人であり，その妃はフォードラ（Fótla）だった。

52） Dumézil, G., *Horace et les Curiaces*, Paris : Gallimard, 1942.

53） パリのルーヴル美術館が所蔵する，ジャック＝ルイ・ダヴィッド（Jacques-Louis David）作『ホラティウス兄弟の誓い』（*Le Serment des Horaces*）（1784年）は，この３兄弟が死を賭した勝利を誓い，父から剣を受け取る場面を描いた傑作である。

54） リウィウス（岩谷智訳）『ローマ建国以来の歴史１』京都大学学術出版会，2008年，56－65頁。古代ローマの歴史家リウィウス（前59年頃―後17年頃）は，ホラティウス兄弟の妹がクリアティウス兄弟のうちの１人と婚約していたと記している。それに対して，ハリカルナッソスのディオニュシウス（前60年から前55年頃生まれ）の『ローマ古代誌』（*Rhomaike Arkhaiologia*）第３巻13, 4によれば，ホラティウス兄弟とクリアティウス兄弟の母親たちは双子の姉妹であり，同時に結婚しかつ妊娠して，「３つ子」の男子を分娩

したことになっている（Cary, E. (trad.), *The Roman Antiquities of Dionysius of Halicarnassus*, London : W. Heinemann ; Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press (Loeb Classical Library), 1953, pp. 56–57）。

55） ドラゴン退治を行う英雄とその兄弟との関係については，ジャン＝マルク・パストレの論考を参照（Pastré, J.-M., « Mythes et Folklores : la naissance fantastique du tueur de dragons », *Revue des langues romanes*, 100, n.2, 1996, pp. 37–61）。先述したフェルドウスィー作『王書』に登場する，蛇王ザッハークを倒すフェリドゥーンも３兄弟の末子であり，キヤーヌーシュとプルマーヤという名の２人の兄がいた。フェリドゥーンの名は，アジ・ダハーカを倒した英雄スラエータオナに由来する。スリタ（「第３の者」）に由来するスラエータオナは元来，風神と雷神に附属した第３の神だったとされるが，フェリドゥーンのケースでは「第３の者」という語源が３兄弟の末子としての意味合いを持ってくる。

56） 拙稿「クー・フリン」（松村一男・平藤喜久子・山田仁史編『神の文化史事典』白水社，2013年，198–201頁）を参照。

57） Guyonvarc'h, C.-J. (trad.), *La Razzia des vaches de Cooley*, Paris : Gallimard, 1994, pp. 92–102.

58）『グラストンベリ修道院古史』の文献上の問題，なかでも12世紀末以降に行われた改竄については，青山吉信『グラストンベリ修道院　歴史と伝説』（岩波書店，1992年）を参照。

59） Faral, E., *La légende arthurienne*, t. II, Paris : Honoré Champion, 1929, pp. 452–453. なおイデールの武勇伝については，拙稿「《アーサー王物語》とクマの神話・伝承」（『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』，2005年，531–549頁）中，532–534頁を参照。

60）「７つ首の獣」型に属するフランス民話については，ポール・ドラリュの著作を参照（Delarue, P., *Le conte populaire français*, t. 1, Paris : Maisonneuve et Larose, 1976, pp. 101–108）。なおフィリップ・ヴァルテールは，民話が神話起源のモチーフを継承しているという前提に立ち，「豊作祈願祭（ロガシオン）」の神話学的分析にあたり，グリム兄弟の『子供と家庭の童話集』（*Kinder- und Hausmärchen*）136番「鉄のハンス」（Der Eisenhans）を傍証の１つに用いている（Walter, P., « L'or, l'argent et le fer. Etiologie d'une fête médiévale : les Rogations », *Le Moyen Age*, 99, 1993, pp. 41–59）。

61） 民話の国際話型 AT 301B「熊のジャン」（Jean de l'Ours）の類話の１つ，フランス・ロレーヌ地方の民話「兵隊ラ・ラメ」（Soldat La Ramée）によると，王女たちを地下に閉じ込めていた７つ首のドラゴンと相対した兵隊ラ・

ラメは，大きなサーベルでまず獣の首を２つ，次に首を２つ，さらに残りの２つの首を刎ねており，最後の一撃までにすでに３度の攻防が見られる（竹原威滋・丸山顕徳編『世界の龍の話』三弥井書店，1998年，179–183頁）。

62） Buhociu, O., « Le mythe indo-européen d'initiation à la guerre : Le motif Daco-Roumain », *Ogam*, 10, 1958, pp. 40-55.

63） ランスロとメレアガンの最初の決闘は，ゴール王国で「キリスト昇天祭」から遠くない時期に行われ，ランスロ優勢のうちに終わる。その折に２人が「１年後に」（'Au chief de l'an', v. 3890）アーサー王宮廷で再び決闘をすることが取り決められる。しかしながら，その後まもなくしてメレアガンは，家令騎士クウ（Keu）と不倫関係を持ったとして王妃グニエーヴルを告発したため，ランスロが王妃の代理騎士としてメレアガンと２度目の決闘を行う。この戦いは，メレアガンの父にあたるバドゥマギュ（Bademagu）王が間に入ることで，決着を見ないまま中断される。

王妃はその後ログル王国へ帰還するが，ランスロの方はゴール王国内で不当に捕えられ，塔に閉じ込められる。馬上槍試合の開催を幽閉中に知ったランスロは，塔の番人の妻を説得して一時的に牢を抜け出し，馬上槍試合の参加後に牢へ戻ってくる。この話を伝え聞いたメレアガンは，石工や大工を呼び集めて「57日以内で」（'An moins de cinquante et set jorz', v. 6137）堅固な塔を完成させ，改めてランスロを幽閉する。それでもランスロは，メレアガンの妹の助けを得て，塔から脱出するに至る。宮廷に辿り着いたランスロにアーサー王が，「まる一冬とまる一夏」（'Et tot iver et tot esté', v. 6872）ランスロを探させたが誰にも見つけられなかったと述べたことから，ランスロが消息不明になってから１年経過したことになる。この直後にランスロとメレアガンの３度目の決闘が行われる。

馬上槍試合から２か月後に堅固な塔が完成し，ランスロが再び幽閉の身となった頃，メレアガンがアーサー王宮廷へ赴き，ランスロが「今日から１年後に」（'d'ui en un an', v. 6173）宮廷で決闘するという約束を守ってほしいと述べていることから，ダニエル・ポワリヨンは３度目の決闘が９月に行われたと推測している（*Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, *op. cit.*, p. 1294, note 1 à propos de la p. 658, et p. 1295, note 1 à propos de la p. 659）。

64） Stiennon, J. et Lejeune, R., « La légende arthurienne dans la sculpture de la cathédrale de Modène », *Cahiers de Civilisation Médiévale*, 6, 1963, pp. 281-296.

65）「アーサー伝承」で王妃グニエーヴルが果たす役割については，拙稿「グウィネヴィア」（松村一男・森雅子・沖田瑞穂編『世界女神大事典』原書房，

2015年，384–386頁）を参照。初夏の頃に大地女神をめぐって冥界の王が天界の王と争うという筋書きは，南フランスに伝わる作者不詳の民謡「明るい季節がやって来て」にも認められる（フィリップ・ヴァルテール，前掲書『中世の祝祭』，166–167頁）。この民謡では，「４月の女王」をめぐって嫉妬深い王とハンサムな若者との間に諍いが生じる。老齢の王と若者はそれぞれ，冬と夏を具現する。

66） 拙稿「クレチアン・ド・トロワ」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社，2007年，53–62頁）のうち，60–61頁を参照。

67） アンクーについては，アナトール・ル＝ブラース（後平澪子訳）『ブルターニュ　死の伝承』藤原書店，2009年，第３章「死の執行人，アンクー」を参照。

68） Dumézil, G., *Horace et les Curiaces*, *op. cit.*, p. 131.

69） エススについては，拙稿「エスス」（前掲書『神の文化史事典』，133頁）を参照。

70） Dumézil, G., *Horace et les Curiaces*, *op. cit.*, p. 133.

71） クレティアン・ド・トロワの遺作『聖杯の物語』前半で，ペルスヴァルが漁夫王から授けられた剣は，トレビュシェットという名の刀鍛冶が鍛えたものだった。この神話的鍛冶師の祖型も「小人」だった可能性がある。こうした解釈については，フランス語による拙稿を参照（Watanabe, K., « Trébuchet, Wieland et Reginn. Le mythe du forgeron dans la tradition indo-européenne », dans : Bayard, F. et Guillaume, A. (dir.), *Formes et difformités médiévales. Hommage à Claude Lecouteux*, Paris : PUPS, 2010, pp. 233–243）。